

# 現代イランにおける儀礼を通じた倫理的主体形成の人類学的研究 —マッダーフの役割に着目して—

椿原 敦子

国立民族学博物館 外来研究員

## 緒言

イスラーム暦ムハッラム月は、十二イマーム・シーア派にとっては儀礼を行う重要な月のひとつである。儀礼では現在のイラクの地カルバラーにて、イスラーム・シーア派第三代イマーム、フサイン・イブン・アリーとその一族が、ウマイヤ朝軍によって殺されたことを悼み、一族の受難と殉教の物語を題材に哀悼歌を歌う。儀礼参加者は、フサイン（ペルシア語でホセイン）のために泣く者は来世での救済を得られるという伝承（ハディース）などを根拠に、哀悼歌に合わせて胸や頭を叩き、涙を流すことがよいとされる。

儀礼の盛衰は時の権力の采配に関わっており、また、儀礼の形態や呼称は時代や地域によって異なる。イラン革命の機運が最も高まった1978年から1979年の間には、哀悼儀礼が大衆の政治参加を促すのに一定の役割を果たした。たとえば、室内で行われる殉教物語や哀悼歌の朗誦であるロウゼ（*rowze*）が時の為政者による抑圧に抗するべく蜂起を促し、哀悼歌に合わせて胸を叩きながら路上を練り歩く、ダステ（*daste*）と呼ばれる巡行がデモ行進へと転化した。イランではこの他に、殉教の物語を劇として再現するタァズイーエ（*ta'zie*）が行われる。革命後のイラン政府はこうした哀悼儀礼が革命の精神を継承するための重要な装置であると考え、メディアをはじめとする様々な方策を用いて儀礼の実施を推奨してきた。革命からおおよそ20年を経た1990年代末から2000年代初頭のイランでは、新しい儀礼の形態が出現した。伝統的な哀悼歌の歌唱法に代わってポピュラー音楽のような歌唱法が流行し、若者たちを惹きつけたのである。

本研究ではイラン革命後の哀悼儀礼の盛衰と形式上の変遷を、社会変化と関連付けながら考察するためにフィールド調査と文献および資料収集を行った。特に、哀悼歌の歌い手である「マッダーフ」の経歴と活動の場の変化に焦点を当てた。

## 研究方法

イランにおけるフィールド調査は2014年10月24日（イスラーム暦1435年ムハッラム月1日、イラン暦1393年アーバーン月2日）より、同年12月8日（イスラーム暦サファル月16日／イラン暦アーザール月17日）の間に実施した。主な調査地は、イラン・イスラーム共和国テヘラン州テヘラン市の、第7行政区と第1行政区である。テヘラン市はエンゲラーブ通り以南に哀悼儀礼を行う施設や集団が多く存在しており、長い歴史の中で培われた集団ごとに異なる特徴を持つ実践が行われている。今回の調査では新しく儀礼を始めたミドルクラスの若者世代の実践を明らかにするため、あえて市内中部および北部を調査地とした。調査はフィールド調査と文献収集からなる。フィールド調査として、儀礼の参与観察と主催者へのインタビュー、そして儀礼の様子を録音・録画したソフトウェアを制作・販売する業者へのインタビューを行った。

## 結果

### 1. マッダーフの経歴の変化

当初の調査予定では、マッダーフの哀悼歌の朗誦技術の習得過程を教育の場の参与観察から明らかにする計画を立てていた。しかし、調査を行ったムハッラム月は教師・生徒の両方が儀礼の実践に従事するため教室が開講される頻度が減少すること、また調査者が女性であるために男性の教育の場に居合わせることに難色を示されたことなどから、調査計画を変更してマッダーフの経歴や技術習得の方法についての聞き取りを行った。

マッダーフ（*maddāh*）とは、字義的には賛美者、賛歌の歌い手を指す。狭義の意味では、イマーム・フサインとその一族を讃える者を指し、現在は一般に専ら殉教語りや哀悼歌の歌い手として理解されている。調査の中で、儀礼の隆盛に批判的なある女性からは“最近のマッダーフたちは人気に乗じて、預言者の生誕祭やラマダー

ンなど様々な年中行事でも歌うようになった”という旨の発言が聞かれた。元来は宗教的な崇敬の対象だけではなく、王や英傑などあらゆる者を賛美する詩人を指していたマッダーフが、現在では専らイマーム・フサインと一族の受難を謡う役割として捉えられていることがうかがえる。しかし、マッダーフ役割は近年の儀礼の隆盛と共に次第に拡大し、先の女性が述べていたように他の宗教的行事でも哀悼儀礼と同じ様式の儀礼が行われるようになった。たとえば、ラマダーン月21日はシア派初代イマーム・アリーの殉教日にはその死を悼んで泣くための儀礼が行われ、その3日忌、7日忌にも同様の儀礼が行われる。

哀悼歌の歌い手は長らく「ロウゼハーン (*rowze khān*)」と呼ばれ、「マッダーフ」の語が用いられるようになったのは比較的近年のことであるとみられる。調査の中でも「ロウゼハーン」や「ノウヘグー (*nowhe gū*)」という呼称が用いられている場合があった。他に類語として頌詩人 (*madihsarā*)、哀歌詩人 (*nowheh sarāy*, *nowheh khān*)、悲歌朗吟者 (*marsīeh khān*) などがある。歴史的な呼称の変遷から「マッダーフ」という用語が登場した背景と意義を辿る作業は、筆者の今後の課題のひとつである。

調査からマッダーフとしての経歴は、世代や地域ごとに異なる傾向が明らかになった。本研究では5名のマッダーフのライフヒストリーを聞き取りと文献資料から検討した。1940年代半ばより活動を開始したある著名なマッダーフはコムの神学校にて修学する傍ら、学識ある「ロウゼハーン」として数々のマルジャーイエ・タグリード (法学権威) の前でロウゼを詠んでいた。かつての都市部での哀悼儀礼の歌い手は、このような宗教的な学識を持つ者が兼業で行う傾向にあった。これに対して、1980年代末以降に都市部で活動を開始した者は、マッダーフに師事して朗誦技術を習得していることが明らかになった。さらに時代が進むと、TVやインターネットで視聴できる有名なマッダーフのパフォーマンスを参考に活動を行う者が増加した。現在は、有名なマッダーフの哀悼詩を書き起こした本やCD、教則本・DVDが販売されている。

マッダーフの経歴や朗誦技術の習得法の変化は、哀悼儀礼を実施するヘイアト (*hey'at*) と呼ばれる組織の増加やその担い手の変容とも関わっている。哀悼儀礼はモスク、廟、テキーイエやホセイニーイエなどの常設・仮設の施設で行われるほか、個人の家庭でも実施され

る。ヘイアトは一つの宗教施設にひとつとは限らず、個人の家からはじまり、参加者が増えると宗教施設を借りるのが一般的である。調査では過去5年以内に活動を開始した20代から30代のメンバーを中心とするヘイアトの関係者から聞き取りを行った。いずれのヘイアトでもマッダーフを務める者はTVやインターネットなどを参考に哀悼歌を習得したり、創作を行っていることが明らかになった。同郷出身者や親族などが集まる従来の哀悼儀礼とは異なり、学校の同級生や友人など、同世代の若者が集まって儀礼を行うようになった背景には、ポピュラー音楽に近い新しい哀悼歌のスタイルが哀悼儀礼の「若者文化」化を促したという事情があると考えられる。

## 2. 複製技術と聴取法の変化

哀悼歌のポピュラー音楽化の背景にはメディアの果たした役割が大きい。2000年代になると、モスクやホセイニーイエなど室内での哀悼儀礼の様子を収録したCDやDVDが制作・販売されるようになった。業者の所在地はテヘランが大部分で、他にコムでも制作・販売が行われている。1999年に創業した宗教関連のCD・DVD制作業者によれば、マッダーフのパフォーマンスがソフトとして本格的に流通するようになったのは2000年代後半であり、それまでは何人かの有名なマッダーフの音源を寄せ集めたオムニバスCDを制作していたという。この業者では現在40名を超えるマッダーフのCD・DVDを扱っており、それぞれのマッダーフにつきソフトが数百枚から数千枚の規模で生産されている。

こうした音・映像ソフトは、哀悼儀礼を執り行う際に生身の歌い手の代用として用いられるケースは皆無であった。新しく結成されたヘイアトでは、熟練したマッダーフを招くことができない場合でもメンバーの中で声の良い者、関心のある者が技術を身につけてマッダーフ役を務める。

それでは、どのような場面でこうしたCD・DVDが用いられるのか。第一に、儀礼の場でのBGMとして用いられる場合がある。会場に人が集まるまでの間、室内のスピーカーでかけられていたり、通行人に紅茶を振舞うスタンドで流されている。とはいえ、そこで用いられる著名なマッダーフが主催メンバーの間で特に好まれているわけではない。「一般的に人気があるから」というのが主な選定の理由である。

第二に、車や室内で個人的に用いる場合である。今回の調査では個人的にCDやDVDを視聴している者が

ら聞き取りを行うことができたのは1事例のみであり、今後更なる検討が必要だが、本調査での聞き取りといくつかの先行研究の事例からは、個人的に音・映像ソフトを消費する者は哀悼儀礼には参加せず、専ら音楽として消費していることが明らかになった。したがって、哀悼儀礼を録音・録画した複製品の消費（聴取）と儀礼への参加は、本物とその代用や疑似体験という関係ではないと考えられる。

### 3. 身体・感情の動きを通じた宗教的価値観の体得

次に、複数の儀礼の場における3つの「願い」の語られ方から、儀礼参加を通じた宗教的価値観の体得についての考察を行った。哀悼儀礼の参加のあり方は男性と女性で異なり、また儀礼を行う場や主催組織の意向、儀礼の形態（室内での儀礼、路上での巡行、殉教劇）によって異なる。たとえば室内の儀礼では、男性の参加者たちは真剣な態度で、哀悼歌に合わせて胸や頭を叩き、涙を流す。一方で女性の参加者は、儀礼の空間が男性や朗読者（マッダーフ）・説教者と隔てられていることから、男性の空間に比して真剣な聴取や規律の整った身体動作は行われていない。ある者はスマートフォンを操作し、その後に突然泣き出すといった具合に、各人が異なるタイミング・やり方で感情をあらわにする。

参加者の多様な態度にも関わらず、調査では哀悼歌の詩や説教、参加者間の会話で頻繁に用いられる「祈願」を意味する語が場所・組織によって大きく二つに分けられ、その違いによって儀礼の行われ方や参加者の作法に共通の特徴が見られた。第一の語は奉納や神への誓いを意味するナズル (*nazr*) であり、第二の語は必要や入用、祈願を意味するハージャト (*hājat*) である。ナ

ズルが「願掛け」という現世利益的な意味合いを持つものに対して、ハージャトの方が個人的な・現世的な事柄にかかわらない祈願であり、より高次の祈りであると一般に定義される。

実際の会話では、ハージャトが現世的な帰結を求める文脈で用いられる場合もあるように、ナズルとハージャトは一定の互換性を持ち、また一つの場に並存する概念でもある。しかし、儀礼の場でナズルという語を頻繁に用いている場合と、ハージャトという語を用いている場合では儀礼の行われ方に顕著な違いが見られた。ナズルは祈願にあたって、あるいは祈願が成就した後に儀礼のための財や労力を供出する。このため、食事やお茶などモノやサービスのやり取りが人と人の間に発生する。一方のハージャトは神と祈願者のコミュニケーション



図2 店頭に並ぶマッダーフのCDやDVD



図1 ハイアトが実施する屋外での儀礼の様子



図3 願掛けのためのお菓子ハルヴァを配る少女



ンを重視し、総じて祈願の前後に人々での行為が発生しない。

結果として、ナズル型の儀礼が参加者同士の相互行為を活性化させ、一見ばらばらに見える人々の嘆きや唱和が、近くに居る人の動作に影響を受けていた。これに対して、ハージャト型の儀礼では主に朗誦者や説教者によって規定される振る舞いが男性・女性の空間のいずれにおいても一律に遵守されている一方で、参加者同士のコミュニケーションは限定的で、総じて没交渉的であった。ナズル型とハージャト型の儀礼参加者を比較すると、ハージャト型の方が地縁や血縁に因らない遠方からの参加者が多く、また男性の参加者に20～30代の若者が多い傾向にあった。儀礼における身体・感情の動きの規律化と価値の体得については、今後も調査を継続し、

規範的な語彙の使用や儀礼の手続きなどを手がかりに考察を深めたいと考えている。

## 謝 辞

本研究を遂行するにあたり、大阪大学の藤元優子先生、竹原新先生、イランの研究機関イスラーム大百科事典のS. サッジャーディー先生、A. ブルークバーシー先生をはじめ、多くの先生方のご協力を賜りました。また、研究成果の発表の場では明治大学の山岸智子先生をはじめとする方々からの貴重な助言より、今後の分析と調査の指針を授かることができました。このたび公益財団法人三島海雲記念財団より本研究へのご支援を賜りましたことを深く感謝いたします。